

薬剤師への夢広がる

大分大病院薬部 高校生が見学



大分大病院薬部で薬剤師の業務などについて説明を受ける高校生たち。真剣な表情で聞き入っていた。由布市挾間町の大分大病院

に調査する現場を見学した。

同部長の伊東弘樹教授が医療現場で果たす薬剤師の役割や日々の業務、大学卒業後の進路などについて説明。「薬学出身者の使命はかけがえない命を見つめ、万人の健康と幸せを守ること。薬学研究者は創薬により世界中の患者を同時に救うことができ、新薬は何万人もの医師に匹敵する」などと強調した。

その後、高校生は院内の調剤室、服薬指導室、製剤室、カンファレンス室を回った。このうち、製剤室では多汗症患者の塗り薬となる塩化アルミニウムローションを実際に調製する作業を見学した。

友人2人と参加した大分舞鶴高1年の吉弘梨七さん（仮名）は「将来は薬剤師として新薬開発の研究に取り組んでみたい。見学会に参加し、目指す薬剤師のイメージを具体的に描くことができました」と話した。

大分大病院薬部は薬学に対する理解を深め、薬剤師・薬学研究者への進路を考える機会を設けようと、高校生対象の見学会を2015年から開いている。

大分大病院薬部は高校生・受験生を対象に、薬剤師の業務や創薬の意義などについて紹介する見学会を

開いた。県内の各高校から約160人が参加。薬剤師が院内の調剤室などを案内し、薬の服用の指導や実際